

空襲警報の中を駅のプラットホームに並び、子供二人は窓から押しこんで、ともかく列車に乗った。目的地へは何日の何時に着くかわからない。ガラスの無い窓に張った板の隙間から覗いて見る焼野の東京から、遠ざかるにつれて、一応は危険が薄らぐようにも思われ、同時に戦線からの脱落者のような思いもあった。ぎしりの乗客達は一樣に口をとぎし、沈みこみ表情もなく揺れていた。

パワー不足の汽車は、トンネルの途中で動けなくなった。後戻りをしたあげく、力を着け直して改めて前進する。それも一度ならずやり直してようやく進んだが、子供の声も上がらなかつた。いつか日が暮れ、夜が明けていた。両親とは松本の駅で別れた。二人はアルプスの麓の町へ向う。私達親子四人は更に先へ

乗り継いで長野へ行く。「ではー」とだけ言って目礼し合った。

長野は古い寺町であった。その古書店の二階が私達の行き場所である。六年間の召集解除後肺炎を病み、やっと人並みの夫だが、此処の日赤病院に職を得た。まず食べつなぐ事は出来るだろう。

この町の千曲川を挟んだ対岸、松代町が、大本営の疎開予定地であり、山の下に大地下壕を掘っていることなど、全く知る筈も無かつた。あるいは最も危険な場所になつたかも知れない土地を頼って私達は到着した。

しかし長野に居られたのも数ヶ月で、再び老幼疎開の声に押された。千曲川に添つて下つた村で、鉄道の駅にも電車の駅にも遠く、バスも通つてはいないが、りんご倉庫の片隅が

借りられるという。迷っている間は無い。すぐに決めた。ほかに行くところは無いのだから。

部屋借りの間は、親類という好意に甘えて使わせてもらった茶碗、箸をはじめとする世帯道具のいっさいを整えなければならぬと、長野の町のおもて、うらを駆け回つた。半分戸を閉じた店も、古道具屋も。むかし景品に配つたものの残りも、貰つて使わなかつた景品も、今譲つてもらうにはお金が要つた。

まずは、珪藻土の七輪と同じくお釜。薄手のやかんに包丁が一本。バケツと洗面器は金物屋さんの特別の厚意。御飯茶碗四個。貰い物のお鍋が一つ。俎のための板の切れ端。洗濯用に古い一斗桶(塩気を抜く)。この時代ゆえに売れ残っていた紅茶の六客セットを見つけたのはお手柄で、湯呑、兼おわん、兼お皿、ポット即ち土瓶。蒲団は両親の行く家に早く送つてあつたのを長野に取り寄せて居たから、そのままそっくり。

八月一日。電車を降りて炎天の道を土埃りをあげながら歩いた。幾曲りしても行き着かない。何という細長い村だ。りんご畑の木の蔭で休んではまた歩いた。上と呼ぶ所から川下の集落まで。四歳の男の子も小さいリュックを背負つて手を引かれながら黙つて歩いた。藁葺屋根の母家に挨拶し、倉庫に案内される。土壁の土間の端に畳敷の一部屋。前はり

# 風歌のふる

## 風景

⑦

齋藤 史



# 戦時疎開



んご畑。部屋の外の軒下に、買って来た古本棚を置けばこれで台所。井戸はすぐ前にある。御主人が軒下に床代りの板を敷き、組立てのかまどを置いて使うようにと言い、薪はりんごの剪定枝が運んであった。じつに大感謝である。縁無しの八枚の畳の上に親子四人坐った。信州の田園の中の、倉庫の一隅が、唯一の身を置ける場所であり、生きる処である。とはいえ勇氣凛々とはいきかねた。知り合いなもない長野市の二階ぐらしては、食糧の入手先もなく、東京に居た時よりも不自由になり、小学生の女の子はげっそり力無く、私は下痢が止まらなくなり生理も消えていた。

村の中期に役場と農業会共通の木造建物がある。転入その他の届出に出かけた。道端に村の小童達が居て、揃って無遠慮な眼を向け

たと思うと、通り過ぎる背後から「ヘーンナモンダ！」という声を浴せた。異様なもの、つまり、化ケモノということらしく、仮りに物体ならば四角いとか丸いとか、食物ならば甘い辛いなどの認識以前の語である。そして私が同じ道を帰ってくるまでに彼等は更にこの子等が生れるより遙か以前にあつた異国人への侮蔑語を私たちに浴せた。それが村では受け継がれているのだつた。当方としては、長野へ来て手に入れた木綿縞のもんぺ、素足に下駄ばき。どこが異様とも思えないが、とにかく額に下げていた前髪を上げて髪形を変えた。―何事も周囲に合せることから始めなければならぬ。両鬢の毛は垂らしたまま。ところが、いつの間にか「あの女耳が無らしい」ということになっていたらしく、気がついたのは小童たちの率直な「耳無し！」の

声だつた。これに対しては村内の古い大寺の行事の日に、両耳を出して髪をくくり、子供の手を引いてゆつくりとお詣りをする事で、その日のうちに一掃することが出来たが、しかしまだその上があつた。

「コジキ！」これは無視。大人達が、「味噌でも芋でも欲しがる乞食のような疎開者」と話すのを口真似して、お金や着物が渡されることは言わない。

農人達は自分の蓄えを他者から求められるのを好まない。武士や領主の取奪に泣いた歴史があるゆえか。まして冬長い山国、外来者を、客人として迎えた海辺の人の伝統はない。境界に塞の神を置いて身を護つた農村の、戦時供出に疲れた中に、割り込んで来たのが疎開者というものだ。母家も男二人は軍隊だという。―物を求める言葉は口にすまい―と決めた。

しなの路の夕まぐれとぞ冷寒く、黄色く  
低き火を焚きにけり  
わが上に夕べひろぐる山山の高くきび  
しきかげの冷酷さ

(さいとう・ふみ 「原型」主宰)

※このコーナーでは、齋藤史氏のエッセイと前登志夫氏のエッセイを交互に連載いたします。